

用途別の需要と見ると、食料用等（食料用、種子用及び工業用を含む）は、人口の増加、都市化の進展及び所得の上昇が著しい地域、特にアフリカのサブサハラ及び東南アジアで堅調に伸びていることから、世界全体で前年度より増加（1.2%）し、571.5 百万トンとなる見込みである。（表 IV-5）

なお、国際連合食料農業機関（FAO）「Food Outlook」（October 2014）によれば、2014/15 年度の一人当たりの小麦消費量の平均は、世界全体で 67.4kg（前年度 67.4kg）、途上国で 60.5kg（同 60.4kg）、先進国で 95.9kg（同 96.0kg）とほぼ横ばいで推移している。

表 IV-5 世界の小麦の食料用等需要の状況

(単位: 百万トン)

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	537.4	541.4	549.5	564.6	571.5	1.2	100
中 国	97.5	98.5	100.0	100.5	101.0	0.5	18
インド	78.9	78.3	80.4	89.2	89.5	0.3	16
E U	70.3	69.7	68.3	67.8	68.5	1.1	12
米 国	27.1	27.7	27.7	28.0	28.1	0.5	5
パキスタン	22.6	22.7	23.3	23.5	23.9	1.7	4

資料：USDA「PS&D」（January 2015）

注）食料用等には、食料用、種子用及び工業用の消費を含む。

中国では、人口増加に伴い、食料用等の需要は前年度より増加（0.5%）し、101.0 百万トンとなる見込みである。

インドでは、人口の増加のほか、貧困世帯に対し毎月 5 キログラムの食糧を低価格で供給することとする 2013 年の「国家食料安全法」（NFSA）の成立により、公的分配システム（※）で安価に食料を提供する対象者が人口の約 3 分の 2 に拡大することから、食料用等の需要は前年度より増加（0.3%）し、89.5 百万トンとなる見込みである。

（※）「公的分配システム」（Public Distribution System, PDS）

①低所得層や社会的弱者への食料安全保障の提供、②緩衝在庫による不測の事態への備え、かつ価格の安定化、③政府買上価格の設定による生産者へのインセンティブ、の 3 つを目的とした制度。米や小麦等の主要作物について、インド食料公社(Food Cooperation of India, FCI)が、生産費、買上必要量、需給状況等を考慮して農業費用価格委員会の設定した買取価格の勧告を受けて最低支持価格(MSP)を決定し、生産者から同価格で買い上げ（買上数量は上限なし）、買い上げた作物を、州政府を通じて低所得者層や社会的弱者等、対象となる国民に安価で提供している。

写真：インド ニューデリー北西部 マディプール地域（2014 年 10 月）（3 枚とも）

公的分配制度に基づく小売店舗
フェア・プライス・ショップ（FPS）
（同店では小麦を原麦で販売）



FPS 近くの商店街にある製粉所とその看板
製粉料金は、1 キログラム当たり 3 ルピー
（主に、地域住人や飲食店が利用する）



小麦の飼料用需要は、生産量が減少した米国等で減少するものの、豊作となったEU、中国等で堅調な需要が見込まれることから、世界全体では前年度より増加（6.8%）し、139.2 百万トンとなる見込みである。

また、穀物全体の飼料用需要は、長期的に増加傾向にあるが、全体に占める小麦の割合は横ばいとなっている。（表 IV-6、図 IV-2）

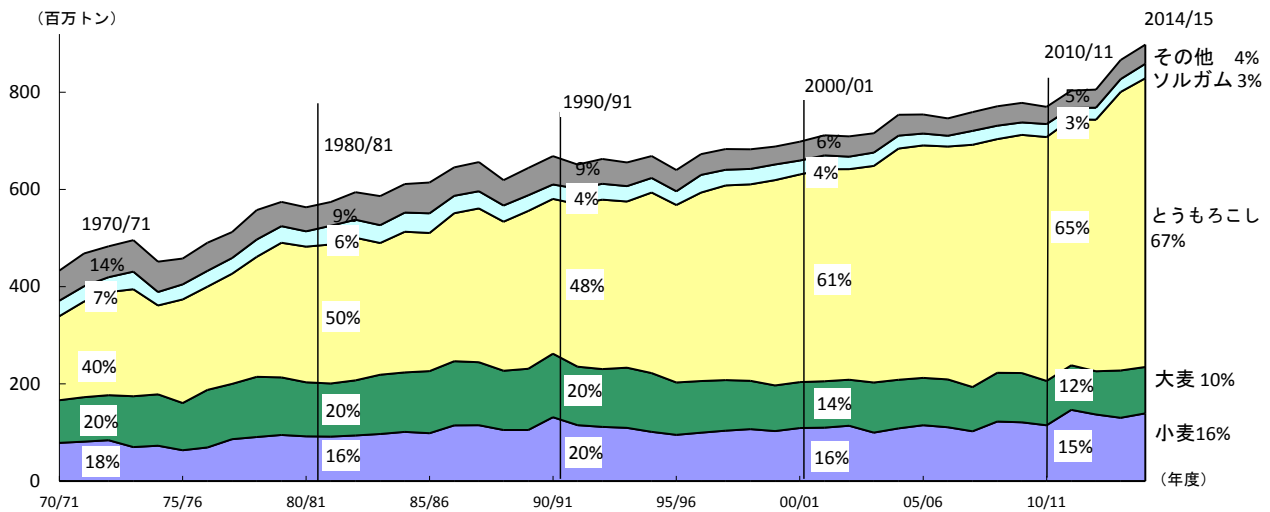
表 IV-6 世界の小麦の飼料用需要の状況

（単位：百万トン）

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 （予測）	対前年度 増減率（%）	世界に占め る割合（%）
世界合計	114.9	146.6	137.1	130.3	139.2	6.8	100
E U	52.5	57.5	51.0	48.0	56.0	16.7	40
中 国	13.0	24.0	25.0	21.0	23.0	9.5	17
ロシア	16.0	15.5	11.9	12.5	13.0	4.0	9
カナダ	2.7	4.7	4.4	4.8	5.0	4.4	4
インド （参考）	2.9	3.1	3.4	4.8	4.5	▲ 6.3	3
米 国	2.3	4.3	10.1	6.1	4.1	▲ 33.6	3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「Grain：World Markets and Trade」、 「PS&D」 （January 2015）

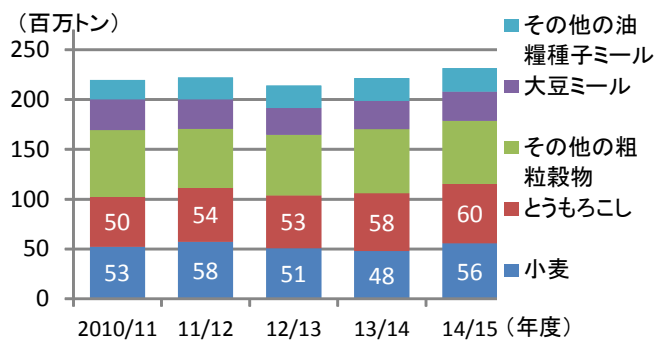
図 IV-2 世界の穀物の飼料用需要の内訳



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain : World Markets and Trade」、「PS&D」(January 2015)をもとに、農林水産省で作成。

図 IV-3 : 品目別飼料用需要の推移 (EU)

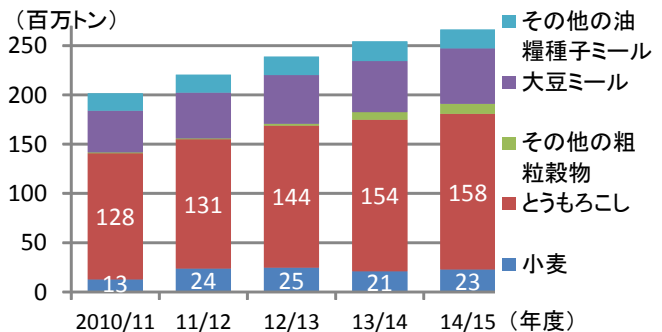
EUでは、生産量が史上最高となったものの、主産地のフランスの一部の産地で収穫時期に土壌水分過多により作物の品質が低下し、低品質の小麦の供給が潤沢であることから、小麦の飼料用需要は前年度より増加(16.7%)し、56.0 百万トンとなる見込みである。(図 IV-3)



資料：USDA「PS&D」(January 2015)をもとに、農林水産省で作成。

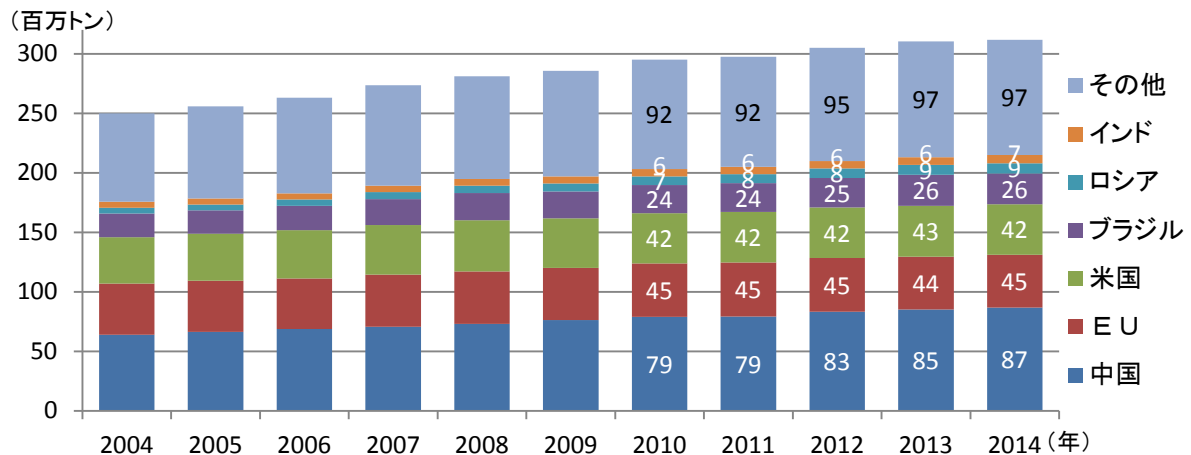
中国では、食肉生産の増加に伴い飼料用穀物の需要は引き続き増加しており、とうもろこしの飼料用需要が継続的に増加する中、2014/15 年度は小麦の飼料用需要も前年度より増加(9.5%)し、23.0 百万トンとなる見込みである。(図 IV-4、図 IV-5)

図 IV-4 : 品目別飼料用需要の推移 (中国)



資料：USDA「PS&D」(January 2015)をもとに、農林水産省で作成

図 IV-5 世界の食肉生産量の推移

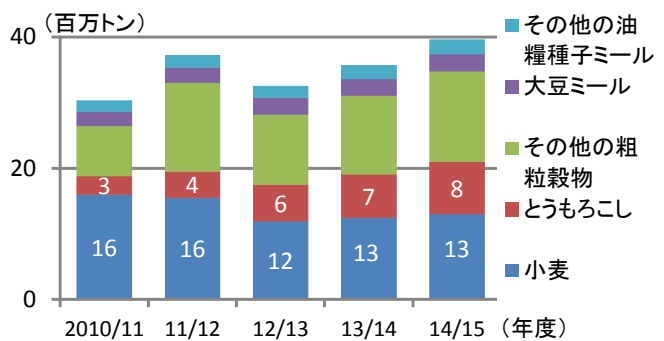


資料：FAO「FAOSTAT」、「Food Outlook (October 2014)」のデータをもとに、農林水産省で作成
 注）生産量は、枝肉重量換算した（carcass weight equivalent）重量

ロシアでは、好天に恵まれて小麦の生産量が増加したこと、飼料用小麦の消費量は前年度より増加（4.0%）し、13.0 百万トンとなる見込みである。（図 IV-6）

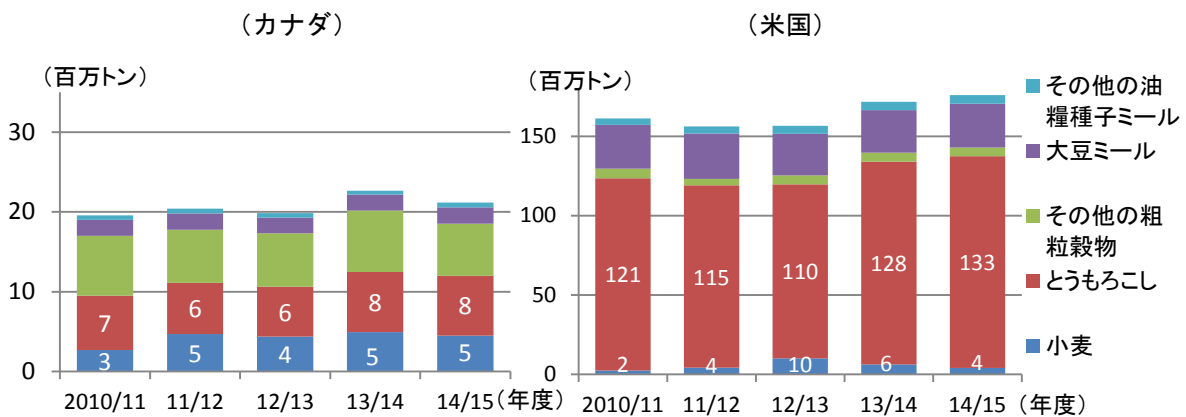
カナダでは、小麦の生産量が減少するものの、悪天候で品質が低下して飼料用となる小麦の割合が高くなること等から、飼料用小麦の消費量は前年度より増加（4.4%）し、5.0 百万トンとなる見込みである。（図 IV-7）

図 IV-6：品目別飼料用需要の推移（ロシア）



資料：USDA「PS&D」（January 2015）をもとに、農林水産省で作成

図 IV-7：品目別飼料用需要の推移（カナダ、米国）



資料：USDA「PS&D」（January 2015）をもとに、農林水産省で作成

米国では、小麦の生産量が減少するほか、とうもろこしの生産量が2年連続で史上最高を更新して飼料用とうもろこしの供給が潤沢となることから、2014/15年度の小麦の飼料用需要は前年度より減少（▲33.6%）し、4.1百万トンとなる見込みである。

なお、2012/13年度の飼料用小麦の飼料用需要は、生産量の増加等から2011/12年度（4.3百万トン）の2倍以上の10.1百万トンと高い水準となったが、その後は2年連続で前年度を下回っている。

ウ 貿易量

2014/15年度の貿易量（輸出量）は、世界全体の生産量は増加したものの、主要な輸出国である米国等での減産等から、世界全体では前年度より6.6百万トン減少（▲4.0%）し、159.2百万トンとなる見込みである。国別には、輸出国ではアルゼンチン、ロシア等で増加し、米国、カザフスタン、EU等で減少する見込みである。一方、輸入国では、イラン等で増加し、中国等で減少する見込みである（表 IV-7、図 IV-8）。

表 IV-7 世界の小麦貿易の状況

（単位：百万トン）

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 （予測）	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	132.8	158.3	137.4	165.8	159.2	▲ 4.0	100
（輸出国）							
EU	23.1	16.7	22.7	31.9	30.0	▲ 6.0	19
米国	35.1	28.6	27.5	32.0	25.2	▲ 21.4	16
カナダ	16.6	17.4	19.0	23.2	23.0	▲ 1.0	14
ロシア	4.0	21.6	11.3	18.5	20.0	7.9	13
豪州	18.6	24.7	18.7	18.6	17.5	▲ 6.0	11
（参考）							
ウクライナ	4.3	5.4	7.2	9.8	11.0	12.7	7
アルゼンチン	9.5	12.9	3.6	2.2	6.0	172.7	4
カザフスタン	4.9	11.8	6.3	8.1	6.0	▲ 25.9	4
（輸入国）							
エジプト	10.6	11.7	8.3	10.2	10.0	▲ 1.7	-
インドネシア	6.6	6.5	7.1	7.4	7.7	4.2	-
アルジェリア	6.5	6.5	6.5	7.5	7.4	▲ 1.1	-
ブラジル	6.7	7.3	7.4	7.1	7.0	▲ 1.0	-
イラン	0.8	0.8	6.6	4.8	7.0	45.8	-
日本	5.9	6.4	6.6	6.1	6.0	▲ 2.0	-
（参考）							
中国	0.9	2.9	3.0	6.8	1.5	▲ 77.8	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、
「PS&D」（January 2015）

輸出国では、増産となったアルゼンチン、ロシア、ウクライナで増加する一方、減産となった米国、カザフスタン、カナダ、豪州等で減少する見込みである。

EUでは、輸出量は史上最高となった前年度より減少（▲6.0%）し、30.0 百万トンとなるものの、生産量が史上最高となり、価格競争力がある飼料用小麦を多く有していること等から、2014/15 年度は米国を抑えて初めて第1 位となる見込みである。

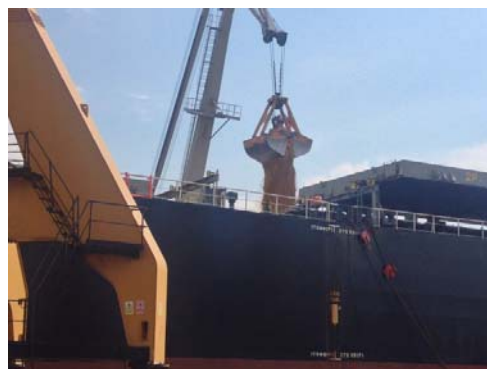
なお、今年度は、主な輸出国であるフランスにおいて収穫時期の降雨で品質が低下したことから、被害を受けなかった高品質のドイツ産小麦は、フランス産小麦の市場である北アフリカ地域向けの輸出が堅調となっている。

写真：ルーマニア コンスタンツァ港（2014 年 7 月）（2 枚とも）

穀物輸送車両の渋滞



穀物ターミナルでの積み込み作業



米国では、生産量が減少したことや、対ユーロを中心としたドル高の進行で国際競争力の低下が懸念されることから、輸出量は前年度より減少（▲21.4%）し、25.2 百万トンとなる見込みである。

カナダでは、生産量が前年度を大きく下回る（▲21.9%）ものの、豊作であった前年度からの持越在庫が潤沢であるとともに、鉄道による輸送状況の改善が見込まれることから、輸出量は 23.0 百万トンと前年度からの減少は 0.2 百万トン（▲1.0%）にとどまる見込みである。

カナダ農務農産食品省「Outlook for Principal Field Crops」（2015 年 1 月）によれば、種類別の小麦輸出量は、デュラム小麦が 4.9 百万トン（対前年度比▲3.4%）、デュラム小麦以外が 18.2 百万トン（同▲1.1%）となっている。

ロシアでは、生産量の増加に伴い、輸出量は前年度より増加（7.9%）し、20.0 百万トンと史上 2 番目となる見込みである。主な輸出先は、トルコ、エジプト、イラン等である。なお、2014 年秋以降、ルーブル安の進展でドル建て決済の国際穀物取引に引きずられて国内の穀物価格が上昇し、インフレが加速したこと等を受けて、その対応策として、ロシア政府は、2014 年 11 月以降、輸出穀物の品質基準の厳格化や、2015 年 2 月から 6 月まで小麦輸出に対する輸出税の賦課等の措置を講じている（詳細は 8 頁（ロシアの輸出規制の動き）を参照）。

豪州では、生産量が前年度を下回る（▲11.1%）ものの豊作であった前年度からの持越在庫が輸出向けに取り崩されることから、輸出量は17.5百万トンと前年度からの減少は1.1百万トン（▲6.0%）にとどまる見込みである。

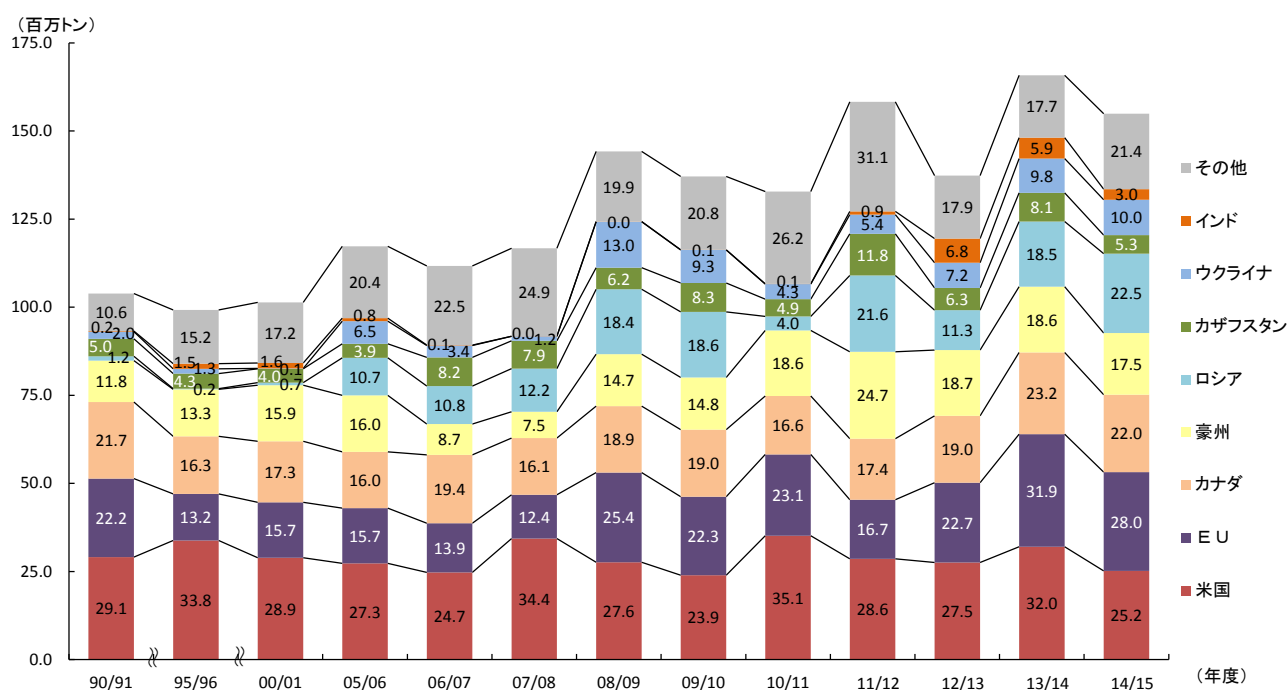
ウクライナでは、生産量の増加に伴い、輸出量は前年度より増加（12.7%）し、11.0百万トンと史上2番目となる見込みである。

2015年1月27日、農業政策・食料省は、同日付けで署名された、同省と穀物輸出業者とのメモランダムとその付属文書を同省ウェブサイトに掲載した。それによれば、2014/15年度（2014年7月～2015年6月）の小麦の目標輸出量は12.8百万トン（2015年1～6月は4.6百万トン）、うち食料用は7.1百万トン、飼料用は5.7百万トンとなっている。また、食料用については、既に作付済の2015/16年度の冬小麦の状態により2015年3月に上方修正される可能性がある。なお、2012/13年度は、生産量が減少したためにウクライナ政府はあらかじめ輸出可能量を示し、輸出量がこの可能数量に迫った時点（2012年12月）で輸出業界は輸出量を自主規制したが、2013/14年度は生産量の回復に伴い、自主規制は行われなかった。

アルゼンチンでは、2012/13年度の大幅な減産に伴い、2013/14年度の輸出量は大きく減少したものの、2014/15年度は、生産量や期末在庫量が回復したことに伴い、輸出量は前年度より大幅に増加（172.7%）し、6.0百万トンとなる見込みである。

なお、アルゼンチンでは、2012/13年度以降、各年度の作況を踏まえて小麦及び小麦粉の輸出枠数量を設定しており、2014/15年度は、2015年1月末日時点で、2014年11月に150万トン、12月に100万トンの計250万トンの輸出枠を承認している。

図 IV－8 世界の小麦輸出量の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain：World Markets and Trade」、「PS&D」（January 2015）をもとに、農林水産省で作成。

一方、輸入国では、イラン、インドネシアで増加するものの、生産量が増加した中国の減少が顕著であり、世界最大の輸入国のエジプトでも減少する見込みである。

エジプトでは、生産量及び消費量がほぼ前年度並みと見込まれる中、主な輸入先であるロシアの輸出規制等の影響が懸念されることから、輸入量は、前年度より減少（▲1.7%）し、10.0 百万トンとなる見込みである。

2014 年 6 月、エジプト貿易省は、主な輸入先であるフランスでの小麦の品質低下を受けて、輸入小麦の水分含有量の上限について、2015 年 2 月までの間、13.0%から 13.5%に引き上げることを発表した。その後、2014 年 12 月には、同措置を 2015 年 2 月以降も継続することを発表した。

インドネシアでは、国内での小麦製品の需要が引き続き堅調で上昇傾向であることから、輸入量は、過去最高となった前年度を更に上回る 7.7 百万トン（対前年度比 4.2%増）となる見込みである。

アルジェリアでは、降水量不足により生産量が前年度を大きく下回る（▲42.5%）ものの、前年度からの持越在庫が取り崩されることから、輸入量は 7.4 百万トンと、前年度からの減少は 0.1 百万トン▲1.1%）にとどまる見込みである。

イランでは、悪天候に見舞われて生産量が前年度を下回るとともに、消費量が前年度を上回ることから、輸入量は前年度より大きく増加（45.8%）し、7.0 百万トンとなる見込みである。

ブラジルでは、生産量が 2 年連続で増加することから輸入量も 2 年連続で減少し、2014/15 年度の輸入量は前年度より減少（▲0.9%）の 7.0 百万トンとなる見込みである。

ブラジルは、従来、主としてアルゼンチンから小麦を輸入していたが、2012/13 年度以降、アルゼンチンが国内流通量の確保とインフレーションの防止のため小麦の輸出枠を設定したためアルゼンチンからの輸入が減少し、それ以降、米国が第 1 位の輸入先となっている。なお、ブラジル開発商工省は、2012/13 年度以降、南米南部共同市場（メルコスール）域外からの小麦の輸入に関し、期限付きで免税措置を講じており、2012/13 年度は、2013 年 4 月 1 日から 7 月 31 日までの間で 1.0 百万トン、2013/14 年度は、2014 年 6 月 23 日から 8 月 15 日までの間で 1.0 百万トンが免税措置の対象として設定された。

中国では、輸入した高品質の小麦を備蓄用や低品質の小麦との混合用に仕向けていると見られているが、2014/15 年度は、好天に恵まれて生産量が前年度を上回るとともに、作物の品質も平年を上回り、高品質の小麦の輸入需要が減少することから、輸入量は 1.7 百万トンと前年度を大きく下回る（▲74.9%）見込みである。なお、中国税関（海関）統計によれば、主な輸入先からの 2014 年 1～12 月の輸入量は、豪州 139.1 万トン（シェア 46.8%）、米国 86.3 万トン（同 29.0%）、カナダ 41.1 万トン（同 13.8%）となっている。

2013 年 10 月、中国国家発展委員会（NDRC）は、2014 年の関税割当（TRQ）枠内数量を、9.6 百万トン（うち、国家貿易の割合は 90%）とすると発表した。

エ 期末在庫量

2014/15 年度の期末在庫量は、消費量が史上最高となる中、生産量が増大した EU、ロシア、ウクライナで輸出が増大するとともに期末在庫も大幅に積み増しされることから、世界全体では前年度より 10.2 百万トン増加（5.5%）し、196.0 百万トンとなり、期末在庫率も 27.5%と（1.1 ポイント増）と前年度を上回る見込みである。

なお、2014/15 年度の世界全体の期末在庫量に占める国・地域別の割合を見てみると、第 1 位の中国が 32%、第 2 位の米国が 10%、第 3 位の EU が 9%と、上位 3 カ国・地域で全体の約半分を占める見込みである。（表 IV-8、図 IV-9）

表 IV-8 世界の小麦の期末在庫の状況

（単位：百万トン）

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占める 割合(%)
世界合計	197.4	196.1	174.4	185.8	196.0	5.5	100
中 国	59.1	55.9	54.0	60.3	62.8	4.1	32
米 国	23.5	20.2	19.5	16.1	18.7	16.4	10
E U	11.9	13.5	10.8	10.6	17.1	61.1	9
インド	15.4	20.0	24.2	17.8	16.3	▲ 8.6	8
ロシア	13.7	10.9	5.0	5.2	9.4	80.6	5
期末在庫率	30.2%	28.1%	25.7%	26.4%	27.5%	1.1	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain : World Markets and Trade」、
「PS&D」 (January 2015)

中国では、生産量が消費量を上回り、期末在庫量が増加（4.1%）し、2002/03 年度以降の過去 13 年間で最高となることから、期末在庫率も 50.2%に上昇する見込みである。

米国では、生産量が前年度を下回るものの輸出量が前年度を下回ることから、期末在庫量は前年度を上回り（16.4%）、期末在庫率は 32.6%に上昇する見込みである。

EUでは、生産量が消費量を上回るとともに輸出量が前年度を下回ることから、期末在庫量は前年度を大きく上回り（61.1%）、期末在庫率も 11.1%に上昇する見込みである。

インドでは、生産量が増加するものの、前年度に引き続き、消費量と輸出量の計が生産量を上回ることから、期末在庫量は前年度を下回り（▲8.6%）、期末在庫率は 16.7%に低下する見込みである。

ロシアでは、輸出量及び消費量が前年度を上回るものの、豊作により生産量が増加することから、期末在庫量は前年度を大きく上回り（80.6%）、期末在庫率も 17.1%に上昇する見込みである。

写真：デリーネアラのせり市場（2014年6月）
競売にかけられる政府備蓄小麦

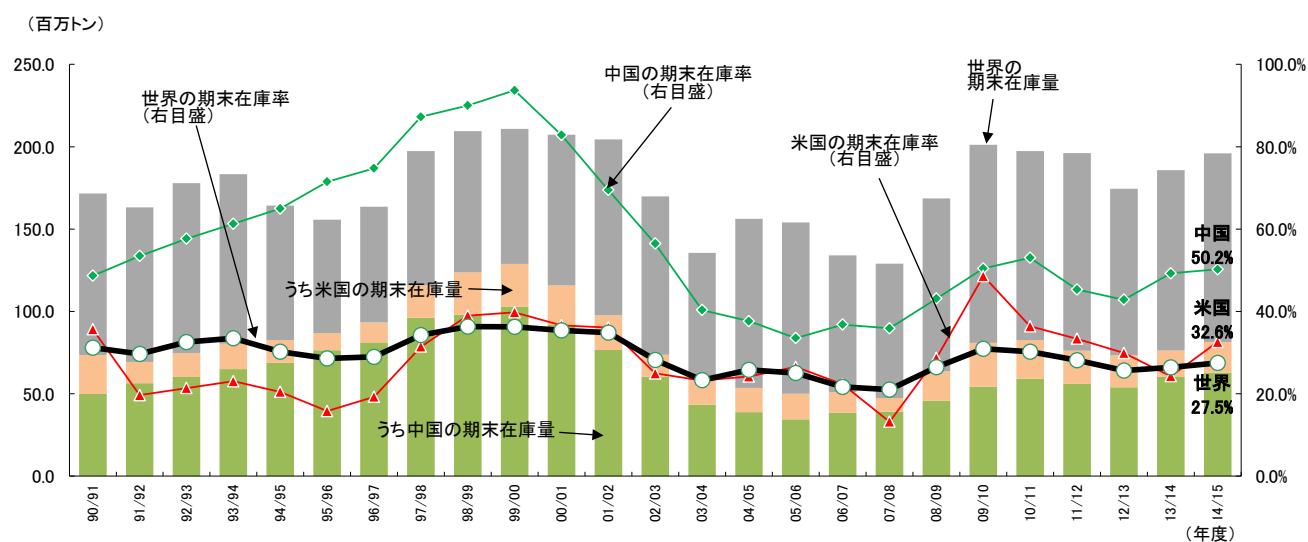


写真：カナダ マニトバ州ウィニペグ近郊
農家所有の穀物倉庫（2014年9月）



写真提供：Agriwatch Research Team

図 IV-9 世界の小麦の期末在庫量（率）の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、
「PS&D」（January 2015）をもとに、農林水産省で作成。